



Title	分節音とアクセント(2) : 岡山方言の分析から
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 1984, 66, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81014">https://hdl.handle.net/11094/81014</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 分節音とアクセント (2)

—岡山方言の分析から—

角 道 正 佳

## Segment and Accent (2)

— Analysis of Okayama Dialect —

KAKUDO Masayoshi

There are two purposes in this paper. In the first half of this paper, morphemic alternations of stems and endings of adjectives are treated considering their accentual alternations. It was found that if /i/ and /u/ are chosen as the underlying forms for the present marker and adverbial marker respectively, rules of assimilation which are necessary in the description of noun conjugations are also applicable to adjectives. The simplest way to describe the accentual alternations of adjectives is (i) to assign accent center in the position of V\_(CV) of the stem and (ii) attract accent center rightward when the stem is followed by present marker (iii) delete accent center when the stem is followed by a morpheme including [+predominating] feature. Accent center assignment, which is collapsable with the accent assignment of verbs necessitates the non-existence of *k* in stem final position of adjectives.

In the second half of this paper, morphemic alternations of verbs are treated without considering their accentual alternations. In the description of verb conjugation, the distinction of vowel stem and consonant stem is useful. Vowel stem verbs are classified into i-stem verbs and e-stem verbs. The underlying forms of endings are as follows.

Group I	present	/ru/	Group II	A negative	/na&i/
	desiderative	/joo/			/N/
	conditional	/rjaa/		B inchoative	/das/
	causative	/sase/			

Group III past /ta/

Initial consonant deletion is applied to Group I endings when they follow consonant stem verbs. Vowel insertion (*a* to A type and *i* to B type) is applied to Group II endings when they follow vowel stem verbs. To Group III ending, complicated processes occur in order to dissolve impossible consonant clusters.

## 2.2 形容詞

2.1 では名詞の場合について述べたが、次に形容詞の活用について見ていくことにする。

### 2.2.1 データ<sup>1)</sup>

	<赤い>	<濃い>	<白い>	<薄い>
終止形	ʔake'e	koi'i	ʃire'e	ʔuʃi'i
志向形	ʔakakaro'o	koikaro'o	ʃirokaro'o	ʔusukaro'o
過去形	ʔa'kakatta	ko'ikatta	ʃi'rokatta	ʔu'sukatta
連用形	ʔa'koo	ko'juu	ʃi'roo	ʔu'suu
仮定形	ʔa'kakerjaa	ko'ikerjaa	ʃi'rokerjaa	ʔu'sukerjaa

### 2.2.2 表層上の交替

終止形は e'e~i'i, 連用形は oo~uu の交替がある。

### 2.2.3 語幹と語尾

<赤い> を例にとってみると、k を語幹と語尾のどちらに入れるかによって二つの考え方ができる<sup>2)</sup>。

	(x) 語幹	語尾	(xi) 語幹	語尾
終止形	ʔake'●	e	ʔake'	●e
志向形	ʔakak	aro'o	ʔaka	karo'o
過去形	ʔa'kak	atta	ʔa'ka	katta
連用形	ʔa'ko●	o	ʔa'ko	●o
仮定形	ʔa'kak	erjaa	ʔa'ka	kerjaa

語尾はさらに次のように分けられる。

	(xii)	(xiii)
終止形	e	e
志向形	ar oo	kar oo
過去形	ar ta	kar ta
連用形	u	u
仮定形	er jaa	ker jaa

## 2.2.4 基底形

kの前には a. i. u の母音が起こりうる。この母音が i であれば終止形は i'i, 連用形は uu になる。(x) に従うと各々の語幹の基底形は /ʔakak/, /koik/, /jrok/, /ʔusuk/ となる。終止形語尾は /i/ もしくは /e/ であり, 連用形語尾は /u/ もしくは /o/ である。

終止形語尾として /i/, /e/ のどちらを選ぶべきかは, 名詞のヲ格の場合と同様に基準はなさそうである。すなわち, (xiv) /i/, あるいは (xv) /e/。一方, 連用形の場合は次のような問題が起こる。名詞〈坂を〉 /saka'&o/ もしくは /saka'&u/ は saka'a とならなければならないが, 形容詞〈赤く〉 /ʔaka(k)&u/ もしくは /ʔaka(k)&o/ は, \*ʔa'kaa となつては困るのである。正しくは ʔa'koo でなければならない。名詞のほうの基底形を /saka&o/ とし, 形容詞のほうの基底形を /ʔaka(k)&u/ とする方法 (xvi), 逆に名詞のほうの基底形を /saka&u/ とし, 形容詞形のほうの基底形を /ʔaka(k)&o/ とする方法 (xvii) の二つが考えられる。すなわち,

(xvi) ヲ格を /o/, 連用形を /u/

(xvii) ヲ格を /u/, 連用形を /o/

の二つである。

(xvi) のほうを選べば規則 (2-12) で両方共説明できる。つまり, a+a→a+a, a+u→a+o (さらに(2-6) によって o+o)。一方 (xvii) のほうを選べば a+o には (2-6) が適用されて o+o になり, a+u には (2-10) が適用されて a+a となる。

もし k が基底にあるものとするれば, 終止形と連用形で k を消去しなければならないことになるが, もし (xiv) を選ぶなら (xvi) を選ぶべきであり, そうでなくても (xv) を選ぶなら (xvii) を選ぶべきである。なぜなら (xiv) と (xvi) を選ぶと k 消去は

$$(2-20) \quad k \rightarrow \phi / \text{---} \& \begin{Bmatrix} i \\ u \end{Bmatrix}$$

また (xv) と (xvii) を選ぶと k 消去は

$$(2-21) \quad k \rightarrow \phi / \text{---} \& \begin{Bmatrix} e \\ o \end{Bmatrix}$$

となつて, どちらも自然な規則であるのに対して, (xiv) と (xvii) を選ぶと k 消去は

$$(2-23) \quad k \rightarrow \phi / \text{---} \& \begin{Bmatrix} i \\ o \end{Bmatrix}$$

また (xv) と (xvi) を選ぶと k 消去は

$$(2-23) \quad k \rightarrow \phi / \text{---} \& \begin{Bmatrix} e \\ u \end{Bmatrix}$$

となるから明らかに不自然な規則になってしまうからである。それでは, (2-20) と (2-21) とではどちらが自然であるかという点, (2-20) のほうである。その根拠として, まず (2-20) を選んだほ

うが、連用形における岡山標準語と岡山方言の関係がはっきりするという点があげられるであろう。岡山標準語の連用形の k が脱落して同化が起こったのが岡山方言の連用形であると考えられるから、(2-20) を選んだ場合は、この関係は自然に説明できることになるが、(2-21) のほうを選ぶとこの関係は自然には説明できなくなる。(2-20) のほうが自然であるという第二の根拠は、この規則が動詞のイ音便、例えば、〈書いた〉を /kak&i&ta/ から自然に派生できるという点にある。一般に k 消去は、高母音 i, u の前で起こると考えられる。以上の理由で終止形と連用形の基底形はそれぞれ /i/, /u/ であるべきであることがわかる。したがって〈赤い〉を例にあげると、各活用形の基底形は次のようになっていると考えられる。

終止形	/ʔakak&i/		
志向形	/ʔakak&ar&oo/		
過去形	/ʔakak&at&ta/	( ← /ʔakak&ar&ta/ )	((2-34) 参照)
連用形	/ʔakak&u/		
仮定形	/ʔakak&er&jaa/	( ← /ʔakak&er&rjaa/ )	((2-28) 参照)

もし (xi) に従うと、終止形と連用形の k は不要であるから、次のようになっていると考えられる。k 消去は岡山標準語と岡山方言をつなぐ規則でしかなくなるので、不要になる。

終止形	/ʔaka&i/		
志向形	/ʔaka&kar&oo/		
過去形	/ʔaka&kat&ta/	( ← /ʔaka&kar&ta/ )	((2-34) 参照)
連用形	/ʔaka&u/		
仮定形	/ʔaka&ker&jaa/	( ← /ʔaka&ker&rjaa/ )	((2-28) 参照)

### 2.2.5 アクセント

形容詞の語幹末に k があるべきか否かは、分節音だけを見ていたのでは判断のしようがないので、次にアクセントの交替のようすを観察してみよう。標準語と違って岡山方言の形容詞には、アクセントの型は一通りしかない。〈赤い〉を例にあげると次のようになっている。

	1	2	3
〈赤い〉	ʔake'e	ʔakakaro'o	ʔa'kakatta ʔa'koo ʔa'kakerjaa

1 は ʔaka' の位置にアクセント核があり、2 は語幹にアクセント核がなく、3 は第一モーラの直後にアクセント核がある。語幹がどのアクセントになるかは、語尾が決めていると考えられる。終止形及び連体形 i はその直前にアクセント核を必要とし、志向形 oo はそれ自体のアクセント核 o'o が実現し、それ以外の場合は語幹の第一モーラの直後にアクセント核が現れる。これらのうち、2 の場合 (すなわち志向形) は、語尾のアクセント核が優先され語幹のアクセント核が消されると考えることができる。こういった性質をもった語尾を「自己主張型」と呼ぶことにする。

それでは、語幹のアクセント核の位置として、1のアクセント核の位置と3のアクセント核の位置のうち、どちらを基本と考えたらよいであろうか。1の型は終止形（及び連体形）、つまりiの前でしか現れないが、3の型は過去形、連用形、仮定形で現れる。過去形、連用形、仮定形に共通の特徴を一言で表現するのは難しいから、3の場合のアクセント核の位置のほうを基本と考えておいたほうが記述は簡単になると思われる。つまり、形容詞の語幹の基本となるアクセント核の位置は3の場合であり、1と2のアクセント核は基本的なものから派生したものと考えることにする。語幹がもっと短い場合と長い場合の例を次にあげよう。

	1	2	3
〈良い〉	ʔe'e	jokaro'o	jo'katta jo'o jo'kerjaa
	1	2	3
〈悲しい〉	kanaʔi'i	kanaʔikaro'o	kana'ʔikatta kana'ʔuu kana'ʔikerjaa
	1	2	3
〈おもしろい〉	ʔomoʔire'e	ʔomoʔirokaro'o	ʔomoʔi'rokatta ʔomoʔi'roo ʔomoʔi'rokerjaa

3の型のアクセント核の位置は〈赤い〉や〈良い〉の場合は第一モーラの直後であるが、〈悲しい〉や〈おもしろい〉の場合は第一モーラの直後ではない、〈赤い〉、〈悲しい〉、〈おもしろい〉に共通しているのは語幹の最後から二つめの母音の直後にあるということである。〈良い〉の場合は語幹が単音節なので最後の母音の直後にあるわけである。このようすを規則の形で表すと次のようになる。もし語幹末にkがあると考えれば(2-24)のようになり、もし語幹末にkがないと考えるならば(2-25)のようになる。

(2-24)  $\phi \rightarrow ' / V \text{ \_\_\_ } (CV)C]_A$  (アクセント核付与)

(2-25)  $\phi \rightarrow ' / V \text{ \_\_\_ } (CV)]_A$  (アクセント核付与)

この二つの規則のうち(2-25)のほうは、動詞のアクセント核付与の説明の際にも利用できる<sup>3)</sup>ので、そのことも考慮に入れるならば、形容詞の語幹末にはkがないと考えたほうが都合がいいことになる<sup>4)</sup>。その場合、k消去をどう取り扱うかが問題になる。kが語幹末にないのであれば、語尾のほうにkがあることになるので、前述の(2-20)ではなく、&の直後でkが脱落するという次のような規則が必要になってくるが、これは2.2.4で述べたように、岡山標準語と岡山方言とをつなぐ働きしかもっていないことになる。

$$(2-20') \quad k \rightarrow \phi / \& \_ \left\{ \begin{array}{l} i \\ u \end{array} \right\} \quad (\text{k 消去})$$

2の場合、すなわち「自己主張型」の語尾が付いている場合のアクセントを説明するには、語幹のアクセント核を消す規則が必要となる。

$$(2-26) \quad ' \rightarrow \phi / \_ X\&Y \quad (\text{アクセント核消去})$$

[+自己主張型]

1の場合（終止形及び連体形）のアクセント核の位置は、語幹の基本的な位置にあるアクセント核を右の方向に引き寄せる次のような規則によって、説明できる。

$$(2-27) \quad M'M\&i \rightarrow MM'\&i \quad (\text{アクセント核牽引})$$

終止形                  終止形

### 2.2.6 規則

規則の順序は、進行同化、逆行同化の順になる。進行同化、逆行同化はすでに述べた規則である。

$$(2-12) \quad \left[ \begin{array}{c} V \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ -\text{low} \end{array} \right] \rightarrow \left[ \begin{array}{c} \alpha \text{ high} \\ \langle \beta \text{ low} \rangle \end{array} \right] / \left[ \begin{array}{c} V \\ \alpha \text{ high} \\ \langle \beta \text{ low} \rangle \end{array} \right] \& \_ \quad (\text{進行同化})$$

$$(2-6) \quad V_1 \rightarrow V_2 / \_ \&V_2 \quad (\text{逆行同化})$$

### 2.2.7 派生

以上述べたことを〈赤い〉を例にとってまとめてみよう。kは語尾の要素であると考えるところにする。一般的にアクセントに関する規則は分節音に関する規則に先行して適用される。[+p]は[+自己主張型]を表す。

/?aka&i/	/?aka&kar&o'o/	/?aka&u/	
	[+p]		
?a'ka&i	?a'ka&kar&o'o	?a'ka&u	(2-25) アクセント核付与
	?aka&kar&o'o		(2-26) アクセント核消去
?aka'&i			(2-27) アクセント核牽引
?aka'&e		?a'ka&o	(2-12) 進行同化
?ake'&e		?a'ko&o	(2-6) 逆行同化
?ake'e	?akakar'o	?a'koo	

### 2.3 動詞

次に動詞について見ていくことにする。動詞は形容詞の場合と違って、アクセントの面で、語幹にアクセント核を持っているもの（有核語幹）と語幹にアクセント核を持っていないもの（無核語幹）との二つのタイプがある。分節音の面からは、母音語幹（一段活用の動詞）と子音語幹

(五段活用の動詞) 及び不規則動詞のカ変とサ変の動詞がある。まず母音語幹の動詞と子音語幹の動詞を見ることにする。母音語幹の動詞は i 語幹 (上一段活用) の動詞と e 語幹 (下一段活用) の動詞とに分かれ, 分節音の面で名詞の場合に見られたのと同じような音韻交替がみられる。そこで各クラスから一つずつ次の動詞を例にあげることにする。

	母音語幹		子音語幹	不規則動詞
	i 語幹	e 語幹		
有核語幹	ʔoki'&ru 〈起きる〉	tabe'&ru 〈食べる〉	ka'k&u 〈書く〉	ku'&ru 〈来る〉
無核語幹	ki&ru 〈着る〉	ʃite&ru 〈捨てる〉	jar&u 〈やる〉	su&ru 〈する〉

### 2.3.1 データ

#### 2.3.1.1 終止形

ʔoki'ru	tabe'ru	ka'ku	ku'ru
kiru	ʃiteru	jaru	suru

#### 2.3.1.2 否定形 (nai と N の二種類の形がある)

A	ʔokina'i	tabena'i	kakana'i	kona'i
	kina'i	ʃitena'i	jarana'i	ʃina'i
B	ʔoki'N	tabe'N	kaka'N	ko'N
	kin	ʃiteN	jaran	sen

#### 2.3.1.3 志向形

ʔokju'u	tabjo'o	kako'o	ko'o
kju'u	ʃitʃo'o	jaro'o	ʃo'o

#### 2.3.1.4 過去形

ʔo'kita	ta'beta	ka'ita	ki'ta
kita	ʃiteta	jatta	ʃita

#### 2.3.1.5 連用形 (「ます」の付く形で代表させる。)

ʔokimasu	tabemasu	kakimasu	kimasu
kimasu	ʃitemasu	jarimasu	ʃimasu

#### 2.3.1.6 仮定形

ʔoki'rjaa	tabe'rjaa	ka'kjaa	ku'rjaa
kirja'a	ʃiterja'a	jarja'a	surja'a

2.3.1.7 命令形 (二つの型がある。)

A	ʔoki'ro	tabe'ro	ka'ke	ko'i
	ki'ro	ʃite'ro	jare	ʃi'ro
B	ʔo'kii	ta'bee	ka'kee	ke'e
	ki'i	ʃite'e	jare'e	se'e

2.3.1.8 継続相現在

ʔo'kjuuru	ta'bjooru	ka'kjooru	kjo'oru
kju'uru	ʃitʃo'oru	jarjo'oru	ʃo'oru

2.3.1.9 継続相過去

ʔo'kjutta	ta'bjotta	ka'kjotta	kjo'otta
kju'utta	ʃitʃo'otta	jarjo'otta	ʃo'otta

2.3.1.10 完了相現在

ʔo'kitoru	ta'betoru	ka'itoru	ki'toru
kito'ru	ʃiteto'ru	jatto'ru	ʃito'ru

2.3.1.11 完了相過去

ʔo'kitotta	ta'betotta	ka'itotta	ki'totta
kito'tta	ʃiteto'tta	jatto'tta	ʃito'tta

2.3.1.12 使役形現在

ʔokisase'ru	tabesase'ru	kakase'ru	kosase'ru
kisaseru	ʃitesaseru	jaraseru	saseru

2.3.1.13 使役形過去

ʔokisa'seta	tabesa'seta	kaka'seta	kosa'seta
kisaseta	ʃitesaseta	jaraseta	saseta

2.3.1.14 始動相

ʔo'kidasu	ta'bedasu	ka'kidasu	ki'dasu
ki'dasu	ʃite'dasu	jari'dasu	ʃi'dasu

2.3.1.15 禁止 (二つの型がある。)

A	ʔoki'runa	tabe'runa	ka'kuna	ku'runa
	kiru'na	ʃiteru'na	jaru'na	suru'na
B	ʔo'kina	ta'bena		ku'na
	ki'na	ʃite'na		su'na

2.3.2 表層上の交替

2.3.2.1 語尾の分節音

tj→tʃ, sj→ʃ, si→ʃi のような口蓋化を除くと、終止形は ru~u, 志向形は juu~joo~oo, 仮

定形は rjaa~jaa, 命令形は ro~e, ii~ee, 継続相現在形は juuru~jooru, 継続相過去形は jutta~juuta~jotta~jootta, 使役形は sase~ase の交替がある。これらのうちで母音語幹と子音語幹の違いによるものは次のとおりである。

	母音語幹に付く語尾	子音語幹に付く語尾
終止形	ru	u
志向形	joo	oo
仮定形	rjaa	jaa
命令形	ro	e
使役形	sase	ase

命令形の交替形 ro~e 以外は、母音語幹に付く形を基本と考えると、最初の子音を落とすことで子音語幹に付く形が得られる。

$$(2-28) \quad \left\{ \begin{array}{c} r \\ s \\ j \end{array} \right\} \rightarrow \phi / C \ \& \ \text{_____} \quad (\text{子音消去})$$

表層の交替形のうち残りのものは i 語幹に付く形か、e 語幹に付く形かの違いである。

	i 語幹	e 語幹
志向形	juu	joo
継続相現在形	juuru	jooru
継続相過去形	juutta~jutta	jootta~jotta

e 語幹に付く形を基本と考えれば、一定の条件で o を u に換える規則があれば i 語幹に付く形を派生することができる。その規則は次のようなものである。

$$(2-29) \quad o \rightarrow u / i \ \& \ j \ \text{_____}$$

これは (2-12) を少し修正すれば簡単に得られる規則である。もし逆に考えて、i 語幹に付く形を基本とすれば、e 語幹に付く形及び子音語幹に付く形を派生するためには次のような不自然な規則が必要になるので望ましくない。

$$(2-30) \quad u \rightarrow o / \left\{ \begin{array}{c} e \\ C \end{array} \right\} \ \& \ \text{_____}$$

否定形、「ます」、「だす (始動相)」の場合は、母音語幹と子音語幹で次のような違いがある。

	母音語幹に付く語尾	子音語幹に付く語尾
否定形 A	nai	anai
B	N	aN
「ます」	masu	imasu
始動相	dasu	idasu

これらについては、母音語幹に付く形を基本と考え、子音語幹に付く形は一定の条件で必要な母

音を挿入すればよい<sup>5)</sup>。

$$(2-31) \quad \phi \rightarrow a \quad / \quad C\& \quad \_\_\_ = \left\{ \begin{array}{l} na\&i \\ N \end{array} \right\} \quad (a \text{ 挿入})$$

$$(2-32) \quad \phi \rightarrow i \quad / \quad C\& \quad \_\_\_ = [ X ]_V \quad (i \text{ 挿入})$$

a 挿入については逆に子音語幹に付く形を基本としておき、母音語幹に付く形は a 消去によって派生することもできようが、一般的に母音が二つ並んだ場合に、一方が消えるとはいえない。i 挿入の場合は、逆の考え方をすると、著しく一般性を欠くことになる。というのは、(2-32) の規則において [ X ] の位置には「ます」、「だす」以外にも「かける」、「そこなう」、「始める」、「終わる」など様々なものが現れるからである。これらがすべて i で始まると考えるのは適当ではない。

### 2.3.2.2 アクセントによる分節音の交替

継続相過去形の jo'otta ~ jotta は jo'otta を基本としておき、アクセント核がない場合に母音を短くするという規則があれば jotta を派生することができる<sup>6)</sup>。

$$(2-33) \quad jootta \rightarrow jotta$$

残りのアクセントによる交替は「分節音とアクセント (3)」で述べる。

### 2.3.3 継続相

2.3.1.8 及び 2.3.1.9 より継続相として joor という形を抽出することができる。現在形と過去形はそれぞれ ru と ta を付ければよい<sup>7)</sup>。

$$joor\&ru \rightarrow joor\&u \quad (2-28) \quad (\text{子音消去})$$

$$joor\&ta \rightarrow joot\&ta$$

過去形のほうは次の規則によって派生される。

$$(2-34) \quad r \rightarrow t \quad / \quad \_\_\_ \&t \quad (\text{促音便化})$$

このプロセスは <やった> jar\&ta → jat\&ta にも適用される。

<食べている (進行相)> ta'bjooru, <捨てている (進行相)> sitjo'oru は /tabe\&joor\&ru/, /site\&joor\&ru/ から子音消去, 母音消去及び tj → tʃ (口蓋化) によって次のように派生される。

/tabe\&joor\&ru/	/site\&joor\&ru/		
tabe\&joor\&u	site\&joor\&u	(2-28)	子音消去
tab\&joor\&u	sit\&joor\&u	(2-5)	母音消去 <sup>8)</sup>
	sit\&joor\&u		口蓋化
tabjooru	sitjooru		

### 2.3.4 完了相

2.3.1.10 及び 2.3.1.11 から完了相として tor という形を取り出すことができる。現在形と過去形は継続相の場合と同様に ru, ta を付ければよい。

tor&ru → tor&u (2-28) 子音消去  
 tor&ta → tot&ta (2-34) 促音便化

〈書いている (完了相)〉 kaitoru, 〈やっている (完了相)〉 jattoru は /kak&i&tor&ru/, /jar&tor&ru/ から次のように派生される。

/kak&i&tor&ru/	/jar&tor&ru/		
ka&i&tor&ru		(2-20)	k 消去
ka&i&tor&u	jar&tor&u	(2-28)	子音消去
	jat&tor&u	(2-34)	促音便化
kaitoru	jattoru		

/kak&i&tor&ru/ に対して /jar&i&tor&ru/ でないのは、/kak&i&tor&ru/ の i が (2-32) の i 挿入で挿入されたものではないからである。この i については 2.3.5 で述べる。

### 2.3.5 過去形

過去形は語幹, 語尾共にさまざまな交替形がある。子音語幹の場合の形を語幹末の音の違いに分類して示してみると次のようになる。

語幹末の音	基底形	表層形		
r	/jar&ta/	jat&ta		〈やった〉
w	/kaw&ta/	kat&ta	岡山標準語	〈買った〉
		koo&ta	岡山方言 I, II, III	〈 〃 〉
k	/kak&ta/	ka&i&ta		〈書いた〉
g	/?ojog&ta/	?ojo&i&da		〈泳いだ〉
s	/?otos&ta/	?otos&i&ta	岡山標準語	〈落とした〉
		?oto&i&ta	岡山方言 II	〈 〃 〉
		?ote&e&ta	岡山方言 I	〈 〃 〉
m	/jom&ta/	jon&da		〈読んだ〉
n	/?in&ta/	?in&da		〈死んだ〉
b	/?job&ta/	jon&da		〈呼んだ〉
i	/?oki&ta/	?oki&ta		〈起きた〉
e	/tabe&ta/	tabe&ta		〈食べた〉

〈買った〉 /kaw&ta/ → koo&ta のプロセスを説明するには、まず w がある条件で u になるという段階があると仮定すると都合がよい。

(2-35) w → u / \_\_\_\_ &C (w 母音化)

aw が au になるとあとはすでに述べた進行同化と逆行同化によって oo になる。

/kaw&ta/		
kau&ta	(2-35)	w 母音化
kao&ta	(2-12)	進行同化
koo&ta	(2- 6)	逆行同化
koota		

ここで大切なことは (2-12) の代わりに (2-13)<sup>9)</sup> を用いることはできないということである。というのは、もし (2-13) を用いると /kaw&ta/ は kaa&ta という正しくない形になってしまうからである。このことは 2.2.4 で述べたヲ格を /o/, 連用形を /u/ とすべきであるという事実を間接的に支持していることになる。

語幹末が g, m, n, b の場合は /ta/ は da になる。

$$(2-36) \quad t \rightarrow d \ / \ \left[ \begin{array}{l} -\text{vocalic} \\ +\text{consonantal} \\ +\text{voiced} \end{array} \right] \ \& \ \_\_\_\_ \quad (\text{有声化})$$

語幹末が k, g, s の場合は i が挿入される<sup>10)</sup>。

$$(2-37) \quad \phi \rightarrow i \ / \ \left\{ \begin{array}{l} k \\ g \\ s \end{array} \right\} \ \& \ \_\_\_\_ \ \&t \quad (\text{i 挿入})$$

k, g は i の前で脱落する。(岡山方言 I, II では s も脱落する。)

$$(2-38) \quad \left\{ \begin{array}{l} k \\ g \end{array} \right\} \rightarrow \phi \ / \ \_\_\_\_ \ \&i \quad (\text{i 音便化})$$

語幹末の m, b は n になる<sup>11)</sup>。

$$(2-39) \quad \left\{ \begin{array}{l} m \\ b \end{array} \right\} \rightarrow n \ / \ \_\_\_\_ \ \&d \quad (\text{撥音便化})$$

語幹末の s は ʃ になる。

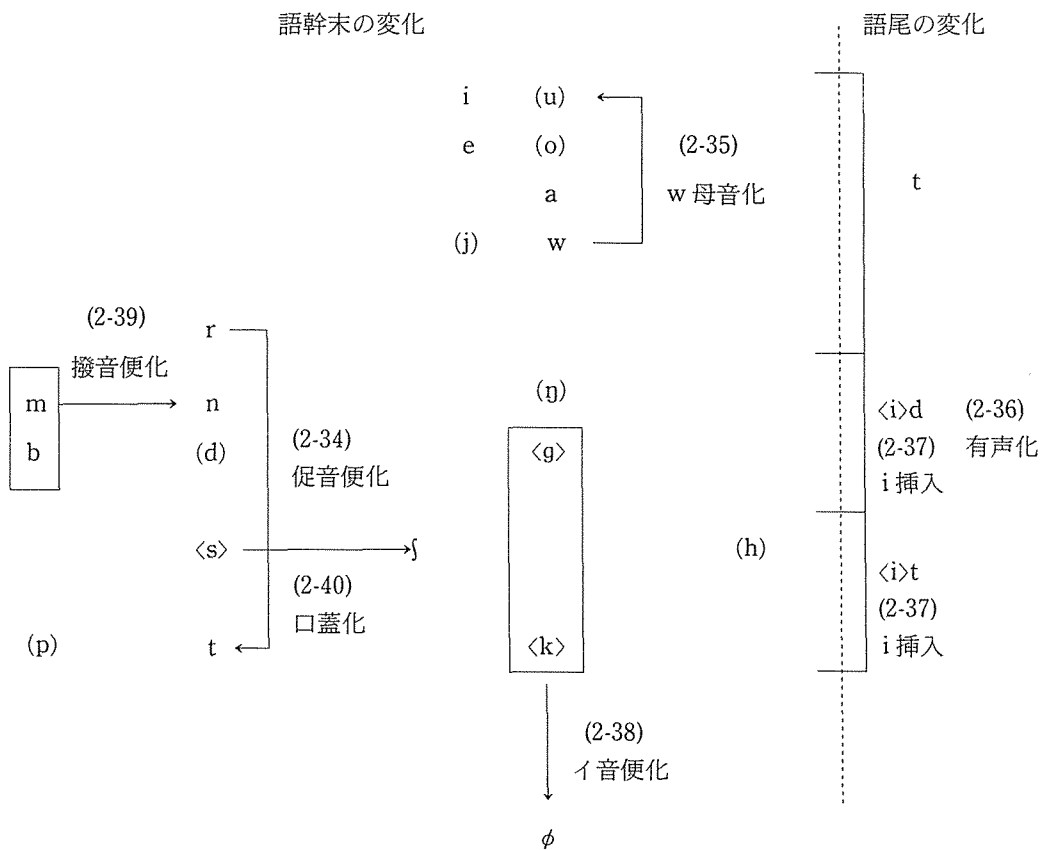
$$(2-40) \quad s \rightarrow \text{ʃ} \ / \ \_\_\_\_ \ \&i \quad (\text{口蓋化})$$

次に派生を述べる<sup>12)</sup>。

/kak&ta/	/ʔojog&ta/	/ʔotos&ta/	
	ʔojog&da		(2-36) 有声化
kak&i&ta	ʔojog&i&da	ʔotos&i&ta	(2-37) i 挿入
ka&i&ta	ʔojo&i&da		(2-38) i 音便化
			(2-39) 撥音便化
		ʔotoʃ&i&ta	(2-40) 口蓋化
kaita	ʔojoida	ʔotoʃita	

/jom&ta/	/jin&ta/	/job&ta/		
jom&da	jin&da	job&da	(2-36)	有声化
			(2-37)	i 挿入
			(2-38)	イ音便化
jon&da		jon&da	(2-39)	撥音便化
			(2-40)	口蓋化
jonda	jinda	jonda		

/ta/ が付く場合の語幹末及び語尾の変化のようすを図示すると次のようになる。



- ( ) 動詞の語幹末に起こり得ない分節音。
- < > k, g, s の後に i が挿入されることを示す。

(註)

1) 活用形の名称は伝統的な名称に従う。終止形は終止形及び連体形の省略として用いる。形容詞の否定形は連用形に付く。標準語と岡山方言の形容詞の違いには、次のようなものがある。

		標準語	岡山方言
A	<酸い>	su'i	sui'i
	<多い>	?o'oi	?oi'i
	<遠い>	tooi	toi'i
	<濃い>	ko'i	koi'i
B	<良い>	jo'i	e'e      *joi'i
	<無い>	na'i	ne'e      *nai'i
C	<白い>	?iro'i	?ire'e      *?iroi'i
	<暑い>	?atsu'i	?at?i'i      *?atsui'i
	<厚い>	?atsui	?at?i'i      *?atsui'i

岡山方言ではAグループの形容詞は語幹末にiという母音をもっているという特徴がある。標準語で語幹末の母音がuまたはoである単音節の形容詞がAグループの形容詞である。標準語で語幹末がuまたはoであっても、単音節語幹でなければCグループのようになる。Bグループの<良い>だけがうまく説明できない。形容詞の否定形は、例えば<赤くない> /?aka&u = na&i/ は ?a'koonee のようになるが、動詞の否定形は、例えば<食べない> /tabe = na&i/ は tabena'i であって tabene'e ではない。また、形容詞の否定形のアクセント核は語幹にあるけれども、動詞の否定形のアクセント核は語幹にはない。これは形容詞に付く /na&i/ と動詞に付く /na&i/ とが別のものであることを示している。ちなみに、否定辞Nは動詞には付くが、形容詞には付かない。

- 2) 標準語では、kは形容詞の語幹の一部ではないと考えたほうが都合がよい理由がある。それは無核語幹の形容詞のアクセント核の位置を正しく説明する必要があるからである。<赤い>を例にとってみるとアクセントは次のようになっている。

	1	2	3
<赤い>	?akai	?akakaro'o	?aka'katta ?aka'ku ?aka'kereba

この基底形は次のようになっていると考えられる。

1	2	3
/?aka&i/	/?aka&'kar&o'o/	/?aka&'kar&ta/
	[+p]	/?aka&'ku/
		/?aka&'ker&re'ba/

すなわち、'kar, 'ku, 'kerがそれぞれ基底形にアクセント核をもっていると考えると、2の場合は「自己主張型」のo'oのために'karのアクセント核は消えるけれども、3の場合は'kar, 'ku, 'kerのアクセント核が現れると考えられる。3の場合のアクセント核の位置を正しく説明するためには、こう考えるのが最も自然である。もし逆にkが語幹末のほうにあると考えると、余分な規則が一つ必要になる。すなわち、例えば、?aka'kattaの基底形が/?akak&ar&ta/だとすると、基底形のアクセントは、語幹が無核である以上、/?akak&'ar&ta/のようでなければならないけれども、この形から?aka'k&ar&taを派生するためには、アクセント核を移動する規則が必要になるからである。

無核語幹の形容詞をもたない岡山方言では、以上の議論はkが語幹の一部であるか、語尾の一部であるかを決める証拠としては利用できない。

- 3) 動詞のアクセント核付与規則は次のような形をしている。詳細は「分節音とアクセント (3)」で述べる。

$$\phi \rightarrow ' / V \text{ \_\_\_\_\_\_ } (C)(V)]_V \quad (\text{アクセント核付与規則})$$

- 4) 筆者の ideoleet では、〈赤い〉は ?ake'e であるのに対し、〈書いた〉は ka'ita であって ke'eta ではない。この事実を説明するためには、〈赤い〉の基底形が /?akak&i/ や /?aka&ki/ であるよりも /?aka&i/ であるほうが都合がよい。つまり、同化は基底形における母音連鎖には適用されるが k が消去の後に出現した母音連鎖には適用されないと考えられるからである。〈書いた〉は /kak&ta/ → kak&i&ta → ka&i&ta のようになると考えられるが、この段階では同化は適用されないと考えると、ke'eta とならないことが説明できる。この関係を規則の順序の面から述べると、同化は k 消去に先行するといえよことになる。〈赤い〉が ?akæ'æ, 〈書いた〉が kæ'æta となるような話者(岡山方言 I) の場合は〈赤い〉の基底形にも k を認めておき、k 消去の後で同化が起こると考えることによって形容詞にも動詞にも同化が起こることを説明することができる。ただし、〈買う〉は岡山方言のどのスタイルにおいても、kau であって koo とはならないから、子音消去の後で同化が起こるとい一般化はできない。
- 5) N 以外は単独でも用いられるものばかりであるから、a や i が頭に付いている形を基底形に選ぶのは、妥当ではない。したがって、Chew (1973: 32-33) の方法は受け入れられない。tabe + anai から tabe + nai 〈食べない〉を導き出すためには、e + a → e という規則が必要であるが、〈食べてあげる〉 tabete + ageru から 〈食べたげる〉 tabetageru を導き出す場合にはこの規則は適用できない。= は & とは違った境界を表す。
- 6) (2-33) の場合は ooC\$ → oC\$ (\$は音節境界) のような一般化ができるけれども、岡山方言 I, II には ta'be, ka'ke に対して、?ite'e, jare'e というように、e~e'e という交替がある。この場合は条件が違うので一般化はできない。

- 7) アクセント核の位置も考慮にいられた分析は「分節音とアクセント (3)」で行う。
- 8)  $V \rightarrow \phi / \text{ \_\_\_\_\_\_ } (j) VV$  「分節音とアクセント (1)」を参照。

$$9) \left[ \begin{array}{c} V \\ \langle +high \rangle \\ \langle +back \rangle \end{array} \right] \rightarrow \left[ \begin{array}{c} \alpha \text{ high} \\ \langle \beta \text{ back} \rangle \end{array} \right] / \left[ \begin{array}{c} V \\ \alpha \text{ high} \\ \langle \beta \text{ back} \rangle \end{array} \right] \& \text{ \_\_\_\_\_\_ }$$

「分節音とアクセント (1)」を参照

- 10) McCawley (1968: 123) では二つのステップを用いている。すなわち、

$$\left\{ \begin{array}{c} k \\ g \end{array} \right\} \rightarrow h / \text{ \_\_\_\_\_\_ } \&t$$

$$\phi \rightarrow i / \left\{ \begin{array}{c} h \\ s \end{array} \right\} \text{ \_\_\_\_\_\_ } \&t$$

ただし h は k, g に対応する摩擦音を表している。McCawley はこのような抽象的な分節音を中間段階に設けておき、その結果 i 挿入の環境が自然になるようにしている。しかし、このような中間段階を設けるべき証拠はない。Ashworth and Lincoln (1973: 14-15) には、自然音韻論 (Natural Phonology) の立場からの詳しい分析があるが、共時的には受け入れ難い。

- 11)  $\left\{ \begin{array}{c} b \\ d \\ m \\ n \end{array} \right\} \rightarrow n / \text{ \_\_\_\_\_\_ } \&d$  とするほうが自然になるけれども、d で終わる動詞は存在しないし、n で終

わる動詞は vacuous である。

- 12) 〈書いた〉と〈書きます〉における k 消去の違いは、境界の違いとして扱うことができる。

/kak&ta/	/kak = mas&ru/		
	kak = mas&u	(2-23)	子音消去
	kak&i = mas&u	(2-32)	i 挿入
kak&i&ta		(2-37)	i 挿入
ka&i&ta		(2-38)	i 音便化
kaita	kakimasu		

参考文献 (追加)

- Ashworth, D. E. and P. C. Lincoln (1973) "Loanwords and Morphology of the Japanese Verb," *Papers in Japanese Linguistics*, Vol. 2:2, Japanese Linguistic Workshop, University of Southern California.
- Chew, J. J. Jr. (1973) *A Transformational Analysis of Modern Colloquial Japanese*, *Janua Linguarum, Series Practica* 56, Mouton, The Hague.
- McCawley, J. D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, Mouton, The Hague.

1984年 6月15日